

学 科 目 名	水産流通経営セミナー Fisheries Information Management Seminar		単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：D (◎)・F (○) ・G (○)		教員名	甫喜本憲 hokimoto@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	2年 前期		メールアドレス	山本義久 yama1215@fish-u.ac.jp 田宮晴彦 htamiya@fish-u.ac.jp 大谷誠 mohtani@fish-u.ac.jp		
質問受付	授業中、教官の指定する時間、担当教員研究室、水産情報館（山本、研究室2）（大谷、研究室1）三学科教養実験棟（甫喜本、211）（田宮、214）					
授 業 概 要						
水産業を取り巻く問題を取り上げた新聞、雑誌などの記事や、わが国の水産施策を要約した「水産白書」など専門書の輪読を行い、水産業の理解を進めるとともに読解力を養う。また文書能力と発表能力を涵養するために、作文実習・ディスカッションなどを行う。受講者の個人的関心にも配慮できるよう少人数で授業を行う。(講義は10名程度の少人数で行うため、2クラス程度のクラス分けを行い、授業は週2回実施)						
授 業 の 目 標						
一般目標：作文能力、資料収集能力、発表能力を習得する。水産流通経営学科に関係する専門書、特に経営・経済関係の諸論文に対する読解力をつける。 行動目標：専門レポートや卒業論文の基本となる文章の作成と発表ができるようになる。						
回 授 業 計 画 ・ 内 容						
回	山本・田宮		甫喜本・大谷			
1～2	文章の書き方の基礎について理解する		カード・ブレインストーミングの方法論を理解する			
3～4	与えられたキーワードに従って小論文を書く		チームに分かれ、カードを書き、ディスカッションを行う			
5～7	受講者の小論文を全員が読み、上位3つを投票する		結果をチームでまとめ、発表する			
8～10	上位の小論文と下位の小論文について共通点検事項を周知の上、論議する		発表（プレゼンテーション）に必要な①発表内容の構成②視覚資料の作成③発表の姿勢、の基礎的知識を学習する			
11～13	評論・討議を踏まえて各自の小論文を修正する		各自で準備した発表を行うことで発表能力を身に付ける			
14～15	水産業の時事問題をキーワードに新たに小論文を書く。					
キーワード	個性、読解力、表現力、ディベート					
教科書 参考書	参考書：『文章術－「伝わる書き方」の練習』樺島忠夫著(角川oneテーマ21) 『水産白書』（農林統計協会） 『ディベート入門』北岡俊明著（日本経済新聞社） ・授業に沿ったレジメ、プリントを配布する。					
評価方法 評価基準	評価方法：レポート及び口頭報告評点(60%)、表現力評点(40%)で総合的に判定する。 評価基準：レポート及び口頭発表については、授業目標についての理解度、達成度を評価する。					
関連科目	水産流通経営学科で開講している全ての共通・専門科目。特に、卒業論文及び就職活動における面接など					
履修要件	水産流通経営学科1学生は全員、必修科目					
教 育 方 法 ・ そ の 他						
毎回レポートの作成もしくは口頭発表を行う。その都度、教員の評価を受ける。それに基づき、さらに新しい内容が付加していくシステムとなっている。なお、学生各自に自己の問題意識を探求するよう促す。						

学 科 目 名	食料経済論 Food Economics	単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	山本 義久 yama1215@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	2年 前期				
質 問 受 付	随時、水産情報館2階、研究室2				
授 業 概 要					
<p>私たちの食生活の現状を把握するとともに、その背景や特徴について学習する。食料品の生産から消費に至るまでのフードシステムの流れを総合的に学ぶとともに、農畜水産物や加工食品など食料全般をとりまく経済現象の分析を通して、日本と世界における食料問題を把握するとともに、魚食の重要性と我が国の食文化継承のための課題を理解する。また、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。</p>					
授 業 の 目 標					
<p>一般目標：我が国における食生活の変遷とその特徴、フードシステムを構成する農水産業、食品流通業、外食・中食産業等の現状や課題を理解するとともに日本と世界における食料問題を理解する。 行動目標：①フードシステムの考え方を説明することができる、②グラフや統計情報から食料をとりまく経済現象を理解し、その社会的・経済的背景を説明できるようになる。</p>					
回 授 業 計 画 ・ 内 容					
回	<ul style="list-style-type: none"> 1 ガイダンスー本講義の内容と学習のポイントの理解 2 フードシステムの理解 3 食生活と環境の変化について学習 4 食の需給の状況について学習 5 日本人の魚食の傾向について学習 6～7 魚食から肉食への変化による健康面の影響の解説 8 農畜水産物の生産について学習 9 食品製造業と食品企業、食品加工技術の展開について学習 10 食品の流通システムと流通技術について学習 11 食料・食品輸入の状況と食料自給率について学習 12 日本の食文化とその継承の問題についての学習 13 世界の食料問題について学習 14 世界の水問題及び輸入問題についてフードマイレージ等に関連させて学習 15 食の安全性と資源・環境問題について学習 				
キーワード	食料経済、食生活、農水産業、食品流通業、外食・中食産業、食料問題、フードシステム				
教科書 参考書	参考書；世界の農業と食料問題のすべてがわかる本（八木宏典）、食は国家なり！日本の農業を強くする5つのシナリオ（横山和成）、学校給食における食材調達と水産物利用（村上陽子）他				
評価方法 評価基準	評価方法；課題提出物（50%）及び小論文（50%）で総合的に評価する。 評価基準；課題提出物によって授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産経済学Ⅰ、水産流通加工ビジネス論、水産物市場構造論、水産物フードシステム実習				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
<p>自作テキスト（配布資料）及びプレゼンテーションを用いた講義を中心とする。関連参考書からの課題を与え提出させるとともに授業の課題の関連情報について学生の理解度を確認しながら授業を進め、適宜、レポートを課し、理解度を評価する。</p>					

学 科 目 名	水産経営学 Fisheries Business Administration	単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	板倉信明 itakura@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	2年 前期				
質 問 受 付	授業の前後、三学科共用実験棟 2階研究室 (206)				
授 業 概 要					
一般的に「経営学」とは企業の経営活動を考える学問分野である。考察の対象は企業である。企業には会社だけでなく個人経営も含まれ、漁業では漁業経営体と呼ばれる。本講義では、経営学の原理を踏まえながら、漁業経営体の経営活動の内容と合理性について学習する。また、授業を進めるにあたり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：①「企業」とは何か、②それら経営体が経営を成り立たせている仕組み、③その仕組みの下で企業が行う人事面、資金面、諸設備及び生産面に関する管理の内容やその意味など、これらについて理解する。 行動目標：漁業経営体の現状や将来的に経営を継続するための漁業経営のあり方や対応策を検討するための基礎的知識を向上させることができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス：考察対象と授業課題を理解する。				
2～3	考察対象（「経営」「企業」「漁業経営体」）の定義を学習する。				
4～6	漁業経営体における経営形態の種類と特徴、及び経営上の意味を学習する。				
7～8	漁業における雇用形態（雇入れの方法、賃金形態等）について学習する。				
9～10	資金調達方法（資金原資の種類、借入先、返済方法等）について学習する。				
11～12	施設（漁船や他諸設備）の管理（所有方法や更新方法等）について学習する。				
13～14	生産管理（商品化や販売方法における利益向上のための視点等）について学習する。				
15	まとめ 一漁業経営のあり方とその課題一				
キーワード	経営形態、経営組織、労務管理、資金管理、生産管理、漁業技術、水産政策				
教科書 参考書	必要に応じて講義中に指示する。				
評価方法 評価基準	評価方法は、期末試験評点(80%)、課題提出物(20%)で総合的に評価する。 評価基準は、試験および提出物共通に、授業内容の理解度、達成度とする。ただし、提出物は左記の他に論理性を加味する。				
関連科目	水産制度論、水産経営学、水産経営分析論				
履修要件	特になし。ただし、本講義で何を学びたいのか、各自の問題意識を明確に持つておくことを望みたい。特に、「経営」という言葉はよく耳にすると思うが、実は多様な要素を含むものである。自分なりの課題を持つておくことが望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
<ul style="list-style-type: none"> ・ 講義の進捗状況に応じて、復習のためのレポート作成を課すことで理解の向上を図る予定である。 ・ 問合せや相談は、原則的には研究室に来室して行うこと。 					

学 科 目 名	水産政策史 History of Fisheries Policy	単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	甫喜本 憲 hokimoto@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	2年 前期				
質 問 受 付	随時、三学科共用実験棟 2 F 研究室 (211)				
授 業 概 要					
戦後日本の水産政策の基底をなす法的枠組 (漁業法、水協法、沿振法等) について学習するとともに、水産業の歴史の変遷とそれに対応した政策手法を学習する。また、現在の水産基本法、基本計画の下での水産業の実像と施策の概要、その問題点やスマート水産業について学習する。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：日本水産業が、黎明期、発達期、低成長期にいかなる課題に直面し、どのような政策的働きかけが行われてきたか、またそれが現在の漁業経営体、流通業者、消費者等の経済活動にどのような影響を及ぼしているかを理解する。 行動目標：現在の水産業が抱える根本的な問題点とその対策に関し、基礎的な知見を持つことができるようになる。					
回					
授 業 計 画 ・ 内 容					
1 講義の全体像と学習のポイントについて理解する。 2 フードシステムの視点と国内の水産物の需給構造について理解する。 3～4 水産行政の歴史—漁業利用と制度改革—について理解する。 5～6 水産行政の歴史—漁業の外延的拡大—について理解する。 7～8 水産行政の歴史—沿振法、特措法、沿構—について理解する。 9～10 水産行政の歴史—外延政策の転換期、低成長期—について理解する。 11 水産行政の歴史—水産基本法—について理解する。 12～14 最近の水産政策の動向やスマート水産業について理解する。 15 まとめ					
キーワード	水産基本法、外延的拡大、中核的漁家、沿岸漁業等振興法、多面的機能				
教科書 参考書	教科書：水産経済学—政策的接近— (小野征一郎著、成山堂書店、2007) 参考書：水産白書 (水産庁編、2021) その他、随時、プリントを使用し、授業時間に配布する。				
評価方法 評価基準	評価方法：定期試験とレポートによる総合評価 (定期試験80%+レポート20%) 評価基準：定期試験、レポートについては、授業目標に関する理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産経済学Ⅰ、水産経済学Ⅱ、食料経済論、水産特論				
履修要件	特にないが、極力配当年次に受講すること。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
必要に応じ、官庁統計等の資料を利用した数量的把握も行い、水産業の具体的な実像に迫る講義を心がける。また、予習・復習のため、課題を与え提出させる。					

学 科 目 名	漁業構造論Ⅰ	単位数	2単位	必修選択の別	必
	The Structure of Japan's Fisheries Industry	教員名	西村絵美		
履修年次・学期	2年 前期	メールアドレス	nisimura@fish-u.ac.jp		
質 問 受 付	随時、水産情報館2階 研究室3				
授 業 概 要					
日本の漁業は沿岸・沖合・遠洋の3つの漁業部門に区分され、異なる経営規模の経営体がそれらを構成する重層的な構造になっている。我が国漁業の生産・就業構造と経営的特徴を理解することで、現代の漁業をとりまく問題の発生要因や対応策を考え、今後の日本漁業の展開方向を理解するための基礎的知識を習得する。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：我が国漁業の生産・就業構造と経営的特徴についての基礎知識を習得する。 行動目標：今後の日本漁業のあり方を検討できるようになる。					
回					
授 業 計 画 ・ 内 容					
1	ガイダンスー本講義の内容と実施方法を理解する。				
2～3	日本漁業の生産基盤について学習し、我が国漁業と漁村の全体像を理解する。				
4	沿岸漁業の生産構造と漁業生産の動向について学習する。				
5	沿岸漁業の就業構造と沿岸漁家の働き方について学習する。				
6	沿岸漁家の経営について学習する。				
7	沿岸漁業における漁業管理について実例を用いて学習する。				
8	日本漁村の現状と漁村地域活性化の取組状況について学習する。				
9	沖合・遠洋漁業の生産構造と漁業生産の動向について学習する。				
10～11	沖合・遠洋漁業の就業構造と会社経営型漁業の経営について学習する。				
12～13	日本の養殖業の特性と生産構造について学習する。				
14～15	養殖業の就業構造と養殖経営について学習する。				
キーワード	沿岸漁業、沖合漁業、遠洋漁業、養殖業、生産構造、就業構造、漁業経営				
教科書 参考書	参考書： 『ポイント整理で学ぶ水産経済』廣吉勝治・佐野雅昭 編著（北斗書房） 『図解 知識ゼロからの現代漁業入門』濱田武士監修（一般社団法人 家の光協会） 『水産白書』（水産庁） 「漁業センサス」、「漁業・養殖業生産統計」（農林水産省）				
評価方法 評価基準	評価方法：期末試験（80%）、課題提出物（20%）で総合的に評価する。 評価基準：期末試験と課題提出物によって授業目標についての理解度・達成度を評価する。				
関連科目	漁業構造論Ⅱ				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
スライドや配布資料を用いて授業を進める。					

学 科 目 名	水産物市場構造論 Marine Products Market Structure	単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	刀禰 一幸 k-tone@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	2年 前期				
質 問 受 付	講義中及び休憩時間中の時間、水産情報館2階 研究室4号室				
授 業 概 要					
水産物流通の仕組み、水揚げから消費までの過程とその関連業務の内容について学び、水産業の現状を理解する。具体的には、産地市場、物流、加工、貿易、消費地市場、水産物消費の動向、資金の流れ、行政や業界団体等の対応についても学び、これからの日本の水産物流通や水産物消費のあり方について検討していく。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：一般商品との市場・流通構造の相違を把握し、日本の水産資源の状況や漁業の状況の特性をふまえ、定量分析（数値化された情報の分析）と定性分析（数値化されていない情報の分析）を用いて、現在の水産物市場構造の特徴を理解する。 行動目標：科学的な論理に基づいて、水産物の市場構造の特徴と課題を理解し、今後の水産物の市場構造のあり方を検討できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス、本講義の全体像と学習のポイントを把握する。				
2～3	産地市場の仕組みと機能、現状と課題について学ぶ。				
4	水産物流通過程における物流の仕組みについて学ぶ。				
5～6	産地から消費地における水産物加工の仕組みと機能、現状と課題について学ぶ。				
7～8	輸出・輸入等の貿易の仕組み、現状と課題について学ぶ。				
9～10	消費地市場の仕組みと機能、市場外流通の特徴、現状と課題について学ぶ。				
11～12	水産物消費、例えば量販店やコンビニにおける水産物販売の特徴や実態について学ぶ。				
13	水産物流通過程における資金の流れ、現状と課題について学ぶ。				
14	水産物流通における行政や業界団体等の対応と機能について学ぶ。				
15	まとめ				
キーワード	水産物流通、物流、関連産業				
教科書 参考書	教科書：授業に応じ適宜プリントを配布する 参考書：『ポイント整理で学ぶ水産経済』廣吉勝治・佐野雅昭著（北斗書房）				
評価方法 評価基準	評価方法；期末試験（70%）、小テスト（30%）で総合的に評価する。 評価基準；期末試験および小テストによって授業目標についての理解度・達成度の確認を行う。				
関連科目	食料経済論、水産統計データ解析、水産物ロジスティック・システム論、水産流通加工ビジネス論、水産経営分析論				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
PPTのスライド等を利用しながらビジュアルに講義を進めていく。					

学 科 目 名	水産制度論 Institution on Fisheries	単位数	2単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	板倉信明 itakura@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	2年 後期				
質 問 受 付	授業の前後、三学科共用実験棟 2階研究室 (206)				
授 業 概 要					
水産業は関連する制度を基盤として成立している。この授業では、これら制度が構築された背景、企図する目標、内容及び当該制度の成立後に漁業がどのように推移してきたのかを理解する。なお、授業を進めるにあたり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：我が国の水産政策や漁業管理に関する制度の内容や仕組について理解する。 行動目標：漁業政策や漁業管理の動向が説明出来るようになる。					
回					
授 業 計 画 ・ 内 容					
1	ガイダンス				
2～3	国内漁業に関わる漁業制度の大枠を理解する。				
4～6	共同漁業権の内容と運用を理解する。				
7	定置漁業権の内容と運用を理解する。				
8	区画漁業権の内容と運用を理解する。				
9	漁船漁業に関わる「許可」の内容と運用を理解する。				
10	関連するその他制度を理解する。				
11～12	戦後日本漁業の展開過程を理解する(復興期～高度経済成長終了まで)。				
13～14	" (高度成長終了～現代まで)。				
15	まとめ				
キーワード	漁業権、共同漁業権、定置漁業権、区画漁業権、許可、展開過程				
教科書 参考書	必要に応じて講義中に指示する。				
評価方法 評価基準	評価方法は、期末試験評点(80%)、課題提出物(20%)で総合的に評価する。 評価基準は、試験、提出物の評価基準は、授業内容の理解度、達成度とする。				
関連科目	漁業構造論Ⅰ・Ⅱ (漁業の現状及び抱える問題点などを理解するのに役立つ)				
履修要件	水産業が成立する仕組や抱える問題点の要因などについて、関心を持つ問題意識を持っておくことが望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の進捗に応じてレポートを課し、各事項に対する理解を図りたい。 ・ 授業中での質疑を期待したい。 ・ 問合せや相談は、原則的には研究室に来室して行うこと。なお、授業に関する質問は、授業後の教室でも可能である。 					

学 科 目 名	漁業協同組合論 Fisheries Cooperative Associations	単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	甫喜本 憲 hokimoto@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	2年 後期				
質 問 受 付	随時、三学科共用実験棟 2 F 研究室 (211)				
授 業 概 要					
地域水産業の核となる地区漁業協同組合を中心に、組織の原理、担っている機能、法制度上の位置づけ、経済事業の特徴、経営問題などの基礎知識を学習する。また歴史的な推移の中で、水産業協同組合がどのように水産業の発展に貢献し、また今日どのような課題があるかやスマート水産業の可能性を学習する。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：漁業者にとっての水産業協同組合の役割、及び組織としての内発的論理を理解する。また、国民経済面から見た水産業協同組合の果たすべき役割を理解する。 行動目標：地域水産業を運営する上で必要な社会的共通資本としての協同組合の意義を理解し、説明できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	1 講義の全体像と学習のポイントについて理解する。 2～3 水産業協同組合の基礎知識について理解する。 4～5 水産業協同組合と資源管理の関係について理解する。 6 小テスト 7～11 水産業協同組合の販売事業や営漁指導について理解する。 12 水産業協同組合と浜プランについて理解する 13 水産業協同組合の信用事業・共済事業について理解する。 14 水産業協同組合の経営問題と組織再編について理解する。 15 水産政策改革以降の水産業協同組合の方向性について理解する。				
キーワード	漁業協同組合、水産業協同組合法、漁村、業種別漁協、漁業権管理、多面的機能				
教科書 参考書	教科書：授業時間ごとにプリントを作成し、配布する。 参考書：水産白書 (水産庁編、農林統計協会、2021) 漁協経営論講話 (山本辰義著、北斗書房、1996)				
評価方法 評価基準	レポートと小テストによる総合評価 (レポート80%+小テスト20%) レポート、小テストについては、授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産経済学 I、水産政策史				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
必要に応じ、官庁統計等の資料を利用した数量的把握も行い、水産業の具体的な実像に迫る講義を心がける。また、予習、復習のため、適宜課題を与え、提出させる。					

学 科 目 名	水産労働論 Labor economics of fisheries	単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	大谷 誠 mohtani@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	2年 後期				
質 問 受 付	随時、水産情報館2階研究室1				
授 業 概 要					
水産業を担う人材について、属性別に就業構造や労働・生活環境、社会的産業的役割を学ぶことで、人材を有効に活用するために必要な確保育成方法や環境整備のあり方を理解する。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する					
授 業 の 目 標					
一般目標：漁業後継者の確保育成や高齢漁業者の有効活用、漁村女性の社会進出、外国人労働力の利活用などに必要な知見を獲得し、水産業の人的資源の強化に資することができるようになる。 行動目標：①水産業の就業動向を分析できる。②水産業で働く人々の特性を属性別に説明できる。③水産業の担い手の確保策を説明できる。④水産業や漁村における労働・生活環境の整備方策を説明できる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス/本講義の内容と実施方法を把握する				
2～3	水産業における就業動向の全体的傾向を理解する				
4～5	漁家子弟（新規学卒）の就業構造や労働・生活環境、確保育成方法を理解する				
6～7	漁家子弟（Uターン）の就業構造や労働・生活環境、確保育成方法を理解する				
8～9	Iターン者の就業構造と労働・生活環境、確保育成方法を理解する				
10～11	高齢漁業者の就業構造と労働・生活環境、有効活用方法を理解する				
12～13	漁村女性の産業的役割と起業化の取組、有効活用方法を理解する				
14	外国人労働力の利活用の現状を理解する				
15	まとめ/講義内容の理解度を確認する				
キーワード	労働経済学、就業構造、労働環境				
教科書 参考書	必要に応じてプリントを使用し、毎授業時間に配布する				
評価方法 評価基準	評価方法：期末テスト評点（80％）、レポート評点（20％）で総合的に評価する 評価基準：テスト、レポートについては、授業目標に対する理解度、達成度を評価する				
関連科目	水産人材育成論				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
学生間や教員とのディスカッション機会を設けながら授業をすすめる。					

学 科 目 名	水産資源経営管理論	単位数	2単位	必修選択の別	必
	Business Management of the Fishing Resources 学習・教育到達目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	西村絵美 nisimura@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3年 後期				
質 問 受 付	随時、水産情報館2階 研究室3				
授 業 概 要					
我が国の沿岸域では、これまで公的な漁業管理制度の下で、地元の漁業者グループが秩序を保って資源や漁場を集団的に利用してきた。日本の漁業者集団による水産資源の利用や自主的管理の意義とその実態について、漁業経営と資源利用の關係に着目しながら学習する。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：我が国における公的な漁業管理制度（漁業権制度、漁業許可制度、TAC制度、TAE制度等）と、漁業者集団による水産資源・漁場の自主的管理の展開及びその意義について、諸外国の資源管理制度（TAC、IQ、ITQ）とも比較しながら体系的に理解する。 行動目標：日本の漁業管理の現状と課題が説明でき、持続可能な漁業のあり方について検討できるようになる。					
授 業 計 画 ・ 内 容					
	1 ガイダンス—本講義の内容と実施方法を理解する。 2 水産資源・漁業の特性、資源管理の必要性、「資源管理」と「漁業管理」を理解する。 3 資源管理の手法（投入量規制、技術的規制、産出量規制）と基本モデル（MSY、MEY理論）について学習し、水産資源管理の実践における基礎知識を修得する。 4～6 我が国の公的な漁業管理制度の展開過程と、その下での漁業者集団による水産資源や漁場の自主的管理の実践について学習する。 7～8 我が国における「資源管理型漁業」の発達とその意義について学習する。 9～10 地域漁業の持続性を高めるために漁業者集団が実践している漁業管理の実例を学習する。 11～12 資源回復計画とTAE制度、資源管理指針・資源管理計画体制について学習する。 13～15 日本の漁獲可能量制度（TAC制度）の特徴、TAC管理の現状や課題について、諸外国の資源管理制度（TAC、IQ、ITQ）と比較しながら学習する。				
キーワード	資源管理、漁業管理、MSY、MEY、資源管理型漁業、資源回復計画、TAE、TAC、IQ、ITQ				
教科書 参考書	参考書： 『漁業管理のABC—TAC制がよくわかる本—』桜本和美著（成山堂書店） 『長谷川彰著作集第1巻 漁業管理』小野征一郎責任編集・多屋勝雄編（成山堂書店） 『ポイント整理で学ぶ水産経済』廣吉勝治・佐野雅昭編著（北斗書房） 『水産白書』（農林水産省）				
評価方法 評価基準	評価方法：期末試験（80%）、課題提出物（20%）で総合的に評価する。 評価基準：期末試験と課題提出物によって授業目標についての理解度・達成度を評価する。				
関連科目	漁業構造論 I				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
スライドや配布資料を用いて授業を進める。					

学 科 目 名	水産人材育成論 Career Design	単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	大谷 誠 mohtani@fish-u.ac.jp 西村絵美 nisimura@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3年 前期				
質 問 受 付	随時、水産情報館2階研究室1				
授 業 概 要					
<p>キャリア教育に対応した科目である。履修学生が自らのキャリアを形成するために必要な、水産系企業に関する知識を習得するため、業種別に業務内容や労働環境、人事教育制度などの特徴を体系的に学習する。さらに、個別企業の特徴を把握するために必要な企業研究の方法を学習する。そして、職業観や勤労意識を醸成することでキャリアデザイン能力（進路、職業、生き方の選択能力）を身につける。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する</p>					
授 業 の 目 標					
<p>一般目標：職業に関する知識を身につけるとともに自己の職業観を育むことで水産人としてのキャリアデザインを主体的に行えるようになる。 行動目標：①水産系企業について業種別の特徴を説明できる。②個別企業について企業研究をおこなうことができる。③職業観や勤労意識を備える人材となる。④キャリアデザインを描くことができる。</p>					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	1 キャリアデザインの概要と必要性を理解する 2～3 自らの職業観や勤労意識を確認し自己探索能力を養う 4～5 水産系企業の特徴を業種別に理解する 6～7 個別企業の企業研究の方法を理解する 8～9 企業訪問（企業見学、OBOG訪問、インターンシップ等）の実施方法を理解する 10～12 企業訪問等の準備及び実践を通して企業研究を演習し実践的なスキルを養う 13～14 企業の労働環境と自己の職業観とのマッチングを図りキャリアデザインを体験する 15 まとめ				
キーワード	キャリアデザイン、企業研究、職業観				
教科書 参考書	必要に応じてプリントを使用し、毎授業時間に配布する				
評価方法 評価基準	評価方法：中間レポート評点（30%）、期末レポート評点（70%）で評価する 評価基準：レポートについては授業目標に対する理解度、達成度を評価する				
関連科目	インターンシップ				
履修要件	必ず配当年次に受講すること				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
学生が就職活動を見据えて主体的に取り組めるよう心がける。					

学 科 目 名	水産地域振興論	単位数	2単位	必修選択の別	必
	Developing planning of fishing community	教員名	藤井 陽介 fujii@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D (◎)	メールアドレス			
履修年次・学期	3年 前期				
質 問 受 付	随時(三学科共同研究棟2階 研究室 210)				
授 業 概 要					
全国各地の水産地域における水産資源の利活用や多面的機能に注目した多種多様な地域活性化の取り組み状況を理解する。これらの取り組み事例を知り、水産資源や多面的機能の特性について理解を深めつつ地域活性化を検討するうえでの基礎的見地を理解する。また、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：多様な水産資源を有する地域の今日的状況に対する問題意識を深める。また、具体的な事例を通じて、水産振興策についてのメリットとデメリットを理解する。 行動目標：水産統計データなどを参考にし、科学的な論理に基づく水産業を基軸とした地域活性化を実現するための方法論を習得することで、さまざまな問題を抱える実際の現場での論理的解決方法を導き出すことができる。					
回 授 業 計 画 ・ 内 容					
回	1 講義全体について理解する。 2～3 我が国行政の意思決定手法と、地域振興の目的と意義について理解する。 4～5 地域振興施策を立案するための論理的思考について、思考実験を通して理解する。 6～7 地域資源の利活用による6次産業化、都市漁村交流の具体施策を取り上げ、水産行政の仕組みと施策について理解する。 8～9 地域特産のブランド化による効果を成功例と成功要因を理解する。 10～11 地域特産のブランド化による効果を失敗例と失敗要因を理解する。 12～14 地域振興のために立案した計画を実行するための方法論として、日程管理、工程管理の概念について理解する。 15 講義全体の総括をするとともに、事例として地域振興施策の計画案を作成する。				
キーワード	漁村社会，地域振興，水産資源，人的資源，水産統計				
教科書 参考書	授業に応じ適宜プリントを配布する				
評価方法 評価基準	評価方法：期末レポート(85%)，各回の課題(15%)で総合的に評価する。 評価基準：期末試験，レポートによって授業目標についての理解度，達成度を評価する。				
関連科目	水産物市場構造論，漁村漁港環境アメニティ論，水産人材育成論，水産経営学，海面利用論。				
履修要件	極力配当年次の受講が望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
参加型の授業を行うため、授業に必ず出席し積極的に参加することを望む。					

学 科 目 名	水産フィールド調査演習	単位数	1 単位	必修選択の別	必
	Exercise on Methods of Field Survey related to Fishery	教員名	甫喜本憲 hokimoto@fish-u.ac.jp		
	学習・教育目標：D (◎)、E (○)、H (○)、I (○)	メールアドレス	山本義久 yama1215@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3年 前期		児玉工 jkodama@fish-u.ac.jp		
			西村絵美 nisimura@fish-u.ac.jp		
質問受付	随時、水産情報館（山本研究室2、西村研究室3）三学科共用実験棟2F（甫喜本211、児玉218）				
授 業 概 要					
卒業論文でフィールド調査を行うにあたり、必要な統計分析、ヒアリング、アンケート調査の技術を学ぶ。また、それを用いて、実際に自ら調査を設計して現場で模擬調査を行い、その結果を取りまとめる。なお、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：統計分析とフィールドワークに関する知識と方法を蓄積し、実習や卒業研究において水産現場の調査を行う技術を身につける。 行動目標：①水産社会科学におけるフィールドワークの意義を説明できる。②水産統計や調査結果のデータを収集し、分析する方法を身につける。③模擬的な調査の結果を発表することができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	1 フィールド調査の意義を学ぶ。 2 統計を用いた整理・分析の方法を学ぶ。 3 ヒアリング調査の方法を学ぶ。 4 アンケート調査の方法を学ぶ。 5 現地調査の実例を学ぶ。 6～15 演習 ① グループに分かれ、テーマを決める。 ② テーマに即した統計整理、調査方法、調査内容を検討する。 ③ 現地調査による結果の集計、整理 ④ プレゼンテーションの準備 ⑤ 発表				
キーワード	フィールドワーク、水産統計、ヒアリング、データ分析、数量的判断				
教科書 参考書	必要資料は担当教員がその都度配布する。				
評価方法 評価基準	評価方法：発表（70%）、課題提出物（30%）で総合的に判断する。 評価基準：分析力、論理性、問題意識、プレゼンテーション技術の観点から評価する。				
関連科目	情報科学、水産物フードシステム実習、漁村漁港環境アメニティ論、水産経済・流通調査				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
水産現場の情報収集に必要な情報収集技術とその応用並びに発表までの一連の流れを習得させる。					

学 科 目 名	HACCP	単位数	1 単位	必修選択の別	必
	HACCP	教員名	前田俊道 toshima@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D	メールアドレス			
履修年次・学期	3年 後期				
質問受付	随時 二学科共用実験棟ドア番号101				
授 業 概 要					
水産加工業の健全な発展のために、安全な食品を製造する管理方法のHACCPについて、HACCPの制度化、一般衛生管理そしてHACCP計画の手順やハザード分析について理解し、水産加工食品についてのHACCPを学習する。授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：水産食品の安全についての専門技術に関する知識と、それらを問題解決に応用できる能力を養う。 行動目標：					
<ul style="list-style-type: none"> ① HACCPの制度化を説明できる。 ② 水産食品の生物的ハザード分析ができる。 ③ 水産食品の化学的ハザード分析ができる。 ④ 水産食品の物理的ハザード分析ができる。 ⑤ CCPを決定できる。 ⑥ 管理基準を決定できる。 ⑦ CCPのモニタリングシステムを決定できる。 ⑧ 改善措置、妥当性確認、検証の手順を説明できる。 ⑨ 食品衛生の一般原則を説明できる。 					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	<ul style="list-style-type: none"> 1 HACCP をめぐる日本の状況を理解する。【HACCP 制度化】 2 コーデックス委員会を理解する。【コーデックス委員会】 3 ISO：22000：2018 を理解する。【PDCA サイクル】 4 HACCP の歴史、用語、7 原則 12 手順を理解する。【GHP】 5 HACCP チームの編成を学ぶ。【メンバー】 6 意図する用途と対象消費者の特定と製造工程図を理解する。【フローダイアグラム】 7 ハザード分析の準備と実施方法を理解する。【生物的・化学的・物理的ハザード】 8 ハザードリストの作成手順を理解する。【原材料・製造工程由来ハザード】 9 CCP の決定方法を理解する。【決定判断図】 10 CL の設定を理解する。【妥当性確認】 11 重要管理点のモニタリングシステムの設定を理解する。【金属探知機】 12 改善措置、妥当性確認、検証の手順を理解する。【OL】 13 文書と記録保管方法を理解する。【SSOP】 14 コーデックスや日本の食品衛生の一般原則を学ぶ。【食品安全文化】 15 潜在的ハザードを学ぶ。【ヒスタミン】 				
キーワード	HACCP, 食品衛生, 食中毒・腐敗				
教科書 参考書	教科書：HACCP管理者認定テキスト（2021年改訂版），日本食品保蔵科学会HACCP管理者認定委員会編、豊福肇・春日正行・日佐和夫共著、建帛社。教科書を事前に用意しておくこと。 参考書：HACCPトレーニング・カリキュラム（高鳥直樹著、幸書房）。よくわかるHACCP（厚生省監修，日本食品衛生協会），HACCP：衛生管理計画の作製と実践（厚生省監修，中央法規），わかりやすいHACCP（HACCP研究会編），HACCP危害分析および重要管理点教育訓練カリキュラム（第4版，大日本水産会）				
評価方法 評価基準	評価方法：期末試験（85%）と小テスト（15%）で総合的に判定する。 評価基準：期末試験は行動目標の達成度で評価する。小テストは、毎授業前に前回の授業内容について問う。				
関連科目	基礎微生物学，公衆衛生学，食品衛生学，食品製造学実習Ⅱ				
履修要件	特になし。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
毎回の予習キーワードを上記授業計画の【 】内に提示するのでこれに関して予習を行い、毎回簡単な予習レポートを提出すること。この提出をもって出席とする。また、毎授業前に前回の授業内容についての小テストを行うので復習をしておくこと。					

学 科 目 名	水産国際関係論 Fisheries international relations	単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	児玉工 jkodama@fish-u.ac.jp 新任教員		
履修年次・学期	3年 後期	山本義久 yama1215@fish-u.ac.jp			
質 問 受 付	随時、三学科共用実験棟 2階教員研究室 (児玉 218、新任未定)、水産情報館 2階(山本研究室 2)				
授 業 概 要					
<p>今日、欧米諸国における健康志向の高まり、新興国における経済発展等を背景に、水産物の需要が世界的に増大している。その一方で、水産資源の利用において国家間の競合は精鋭化するとともに、資本、技術、労働力や水産物の国を跨ぐ移動は活発化している。このように様々な側面において水産業のグローバル化が進展する中において、本授業では日本を中心とした水産に係る国際関係とその国内水産業への影響について学習する。また、前記を踏まえ、水産分野の国際関係のあり方について考える。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。</p>					
授 業 の 目 標					
<p>一般目標：日本の水産業をグローバルな視点から捉えることができるようになる。 行動目標：日本を中心とした水産に係る国際関係とその国内水産業への影響について理解することにより、水産分野の国際関係のあり方について考察力を高めることができる。</p>					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	授業全体のガイダンス				
2	水産物消費、漁業生産、養殖業生産、水産物貿易の世界的な動向について学習する。				
3～7	漁業をめぐる国際関係について学習する。				
8	前半部のまとめ				
9～12	水産の国際交渉について学習する。				
13	国際関係に関する法整備について学習する。				
14	水産業の国際貿易について学習する。				
15	まとめ				
キーワード	グローバル化、漁業協定、入漁、水産物貿易、国際協力、国際法				
教科書 参考書	教科書：適宜プリントを配布する。 参考書：適宜紹介する。				
評価方法 評価基準	評価方法：定期試験 (80%)と課題提出物 (20%) でもって総合的に判定する。 評価基準：定期試験と課題提出物を基に授業の目標の理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産経済学Ⅰ、水産経済学Ⅱ				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
<p>授業はパワーポイントを使用して行い適宜プリントを配布するが、ノートをとることが望ましい。授業の理解度を把握するため、講義終了時に課題を課すことがある。</p>					

学 科 目 名	養殖経済論 Economics of aquaculture	単位数	2 単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標： D (◎)	教員名 メールアドレス	佐野 雅昭 (非常勤講師) sano@fish.kagoshima-u.ac.jp		
履修年次・学期	3 年前期 (集中講義)				
質 問 受 付	授業中及び休み中の時間 情報館 1 F。なお授業を進めるにあたり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。				
授 業 概 要					
<p>資源問題などを契機として漁獲漁業生産が低迷する中であって、食料供給産業としての養殖業に対する期待が高まっている。しかしその制度や業界構造、経営には課題が多く、「養殖」という食料生産スタイル自身が根本的な問題を抱えていることも明らかである。今後この産業が持続的に発展するためには大きな変革が必要とされる時期に来ているのではないか。</p> <p>そこで給餌養殖業の中でも産業上重要かつ典型的な業界構造を有するブリ類養殖業に焦点を当て、その生産条件や市場動向、新しい動きと業界再編の状況を、経営・経済的に体系立って学習する。</p>					
授 業 の 目 標					
<p>一般目標： 1. ブリ類を中心とする給餌養殖業の展開過程とその構造を理解する。 2. ブリ類養殖業の産業としての問題点と課題を、生産から消費にわたり幅広く理解する。 3. 世界の養殖資本の動向に関する知識を身につける。</p> <p>行動目標： 1. 給餌養殖業の現実を理解し、客観的で正確な認識を持てるようになる。</p>					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	養殖業の概要を学ぶ～ホタテ、ノリ、ワカメ、カキ、ブリ類等の養殖について知る。				
2～3	養殖業の経済を学ぶ～生産コスト、成長と歩留まり、価格形成の仕組みについて知る。				
4～5	日本のブリ類養殖業の展開過程を学ぶ～技術の変遷、産地間競争と産地移動などを知る。				
6	養殖環境と魚病問題について学ぶ～養殖新法の目的と効果を理解する。				
7	ブリ類養殖の業界構造を学ぶ～繰り返される過剰供給と価格暴落の原因を理解する。				
8	養殖魚の市場性を学ぶ～価格訴求と並行した安全・安心への要請、海外市場の開拓を知る。				
9	養殖餌料の動向を学ぶ～環境問題の発生とEPへの転換、MPへの回帰などを理解する。				
10	養殖経営の悪化と債務処理・経営再編への展望を学ぶ。				
11～14	ブリ類養殖業の経営再編を実例から学ぶ～(1)漁家型、(2)企業型、(3)漁協主導型、(4)ネットワーク型のケーススタディを行い、特徴やメリットを理解する。				
15	海外養殖業資本の戦略を学ぶ～チリ、ノルウェーの事例から世界の養殖を理解する。				
キーワード	給餌養殖、魚類養殖、ブリ類、養殖新法、養殖経営				
教科書 参考書	教科書：なし 参考書：濱田英嗣「ブリ類養殖業の産業組織」 佐野雅昭「サケの世界市場～アグリビジネス化する養殖業」				
評価方法 評価基準	評価方法：期末テスト(80%)と小テスト(20%)で総合的に判断する。 評価基準：期末テストについては、授業目標についての理解度、達成度。				
関連科目	水産経済学、水産経営学、食品経済論、水産企業論、漁業協同組合論、水産物消費マーケティング論				
履修要件					
教 育 方 法 ・ そ の 他					
<p>講義の内容は専門性が高く、複雑で多岐にわたる。理解しやすいようにPPTのスライド等を利用しながらビジュアルに講義を進めていくが、集中して真剣に受講しないと理解が深まらない恐れがあるので、受講態度に十分に留意していただきたい。講義中の私語や携帯電話の操作は当然ながら厳禁である。</p> <p>将来、養殖関連産業に就職を考えている学生には是非受講していただきたい。</p>					

学 科 目 名	水産特論 Special Lecture about the Fisheries	単位数	2単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：A (◎)・D (○)	教員名 メールアドレス	甫喜本憲 hokimoto@fish-u.ac.jp (水産流通経営学科) 学外講師 (行政、研究、業界、系統等、 各機関の職員)		
履修年次・学期	3年 通年	質問受付 随時 三学科共用実験棟2階甫喜本研究室(211)			
授 業 概 要					
1年をかけて、主に水産業にかかわる国や全国組織の機関で要職にある担当者から政策、研究、並びに水産業界等における最新の取組等について講義を受け、現在の水産業の課題と政策、問題解決のための考え方や専門的な技術について学ぶ。概ね前期では、水産行政の担当者、後期では、研究機関及び業界団体や系統団体の方を講師とする。この講義によって、水産業の役割、課題、その対応策などの全体像を捉え、主体的に課題解決へ取り組むための問題意識及び対応策の検討ができる力を養うことができる。 これまでの主な講師所属機関：水産庁、水産研究・教育機構(本部、研究所)、大日本水産会、全国漁業協同組合学校等。					
授 業 の 目 標					
一般目標：水産業の現状を論理的・総合的に把握できる視野を養い、実際の水産業の課題と政策、問題解決のための考え方と技術について理解する。 行動目標：①広い視野から水産業界に対する理解を深める。②現実的な水産業の課題と対応策を考察できるようになる。③水産行政と水産研究、水産教育の関係を理解することができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	水産特論で学ぶ内容とその目的を理解する(水産流通経営学科教員)。				
2～7	水産行政に直接携わっている行政官及び水産業界団体担当者から、最新の国内外の漁業と水産資源の状況、漁業経営、水産物流通、これらに係る国内外の議論、課題と施策等に関して学ぶ。				
8	2～7の講義を踏まえ、水産行政の現状と変化等について学ぶ。				
9～14	水産研究・教育機構研究開発職員から、現在の水産業の課題とそれを解決するべく研究の考え方や技術等について学ぶ。				
15	9～14の講義を踏まえ水産研究の体制と方向等について学ぶとともに、水産行政と水産研究、水産教育の関係を把握する。				
キーワード	水産行政、水産研究、水産資源、漁業・養殖技術、水産物流通、水産教育				
教科書 参考書	教科書：プリントを配布する。 参考書：「水産白書」水産庁編(農林統計協会)				
評価方法 評価基準	評価方法：講義ごとに提出されたレポートから総合的に判定する(100%)。 評価基準：いずれも評価の基準は、授業目標への理解度、達成度である。				
関連科目	水産業の現状や課題、水産行政施策が講義内容となるため、水産大学の全学科において開講している専門科目の多くが関連する。				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
3年生全員の必修科目となっており、4年次直ぐに行われる公務員試験等の対策科目として位置づけられる。通年科目であるため、開講日に注意すること。					

学 科 目 名	水産管理環境論 Management and Environment on Fisheries	単位数	2単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	工藤貴史【非常勤講師】 kudot@kaiyodai.ac.jp		
履修年次・学期	2年 前期				
質 問 受 付	メールで質問を受け付けます。				
授 業 概 要					
自然と社会に制約的な影響を受ける水産業の産業的特質を理解するために、まずは漁場環境と水産資源の自然特性・社会特性に関わる基礎的知識を習得し、次いで実際の事例から漁場環境の変化や水産資源の量的質的变化が地域漁業に及ぼす影響と漁業構造の変容過程について学ぶ。さらに、以上の理解を深めた上で、水産業が維持・発展するための課題についても検討していく。					
授 業 の 目 標					
一般目標：水産業を取り巻く自然と社会、漁場環境・水産資源、漁業・水産業の諸関係を構造的に把握して、水産業の産業的特質と水産業を維持・発展させるための課題について理解する。 行動目標：1) 漁場の社会特性と自然特性について説明することができる、2) 水産資源の社会特性と自然特性について説明することができる、3) 漁業とそれを取り巻く自然・社会との相互連関関係について説明することができる、4) 3) を踏まえて水産業が維持発展するための普遍的課題について説明することができる。					
回					
授 業 計 画 ・ 内 容					
1	水産業の産業的特質～水産業を取り巻く自然と社会～（社会-生態系アプローチ）				
2～3	漁場環境と水産資源の一般的性格				
4～6	漁場環境の人為的改変と地域漁業の変容 東京湾を事例に（マハゼとホンビノスガイ）				
7～8	漁場環境の人為的改変と地域漁業の変容 霞ヶ浦を事例に（「中心」と「周辺」）				
9～10	富栄養化/貧栄養化と地域漁業の変容 瀬戸内海を事例に（社会関係資本と持続可能性）				
11～12	レジームシフトによる水産資源の変動と地域水産業の変容 マイワシ資源を事例に				
13～14	新しい海洋利用秩序の形成と漁場利用の展望・課題				
15	まとめ				
キーワード	漁場環境、水産資源、地域漁業、構造変化、自然と社会				
教科書 参考書	プリントを配布する。参考書や参考となる論文については授業で紹介する。				
評価方法 評価基準	評価方法：レポート評点(100%)で評価する 評価基準：授業目標に対する理解度、達成度を評価する				
関連科目	水産経済学Ⅰ、水産経済学Ⅱ、漁業構造論Ⅰ、漁業構造論Ⅱ				
履修要件	特になし。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
各回の授業の終わりに内容を振り返りながらディスカッションをして、その内容を踏まえながら各自小レポートを提出する。次の回において学生からの小レポートを紹介しつつ復習して理解を深める。					

学 科 目 名	水産物消費マーケティング論	単位数	2 単位	必修選択の別	選
	Fish Consumption and Marketing	教員名	久賀 みず保 (非)		
	学習・教育目標：D (◎)	メールアドレス	kuga@fish.kagoshima-u.ac.jp		
履修年次・学期	2年後期 (集中講義)				
質問受付	随時 メールにて (mailto:kuga@fish.kagoshima-u.ac.jp)				
授 業 概 要					
マーケティング理論の基礎の習得するとともに、学んだことを自分自身の大学生活や就活に生かせるような、マーケティング実践力を獲得する。下記目的に接近するため、なるべく現実の事例に即した内容とし、現実を生かせる技術を身につけられる講義としたい。					
授 業 の 目 標					
<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義によりマーケティング理論の基本やマーケティング的発想を学ぶ。 2. 具体的な事例の紹介によりマーケティングの具体的道筋と現実的意義を知る。 3. 食品に関するマーケティングについての知識を深め、水産物販売の難しさを理解する。 					
授 業 計 画 ・ 内 容					
1	オリエンテーション～マーケティングのコンセプト：顧客志向がすべて～				
2	マーケティングのプロセスとマーケティングミックス				
3	市場機会の発見～環境分析と競争戦略：どこで誰と何を獲得するための競争をするのか？～				
4	セグメンテーションとターゲティング～ターゲット顧客の定義～				
5	ポジショニングの重要性～競合に対する差別性、優位性の定義～				
6	顧客価値と顧客満足～顧客とは何か？～				
7	市場での競争相手～競争地位と市場戦略～				
8	顧客価値の創造 (1) ～製品戦略：顧客にとっての価値の創造～				
9	顧客価値の創造 (2) ～ブランド戦略：マーケティングの到達点～				
10	顧客価値の伝達 (1) ～流通チャネル戦略：価値を届けられるチャネルとは～				
11	顧客価値の伝達 (2) ～コミュニケーション戦略：顧客との相互の信頼づくり～				
12	顧客価値の説得 (1) ～営業戦略：ビジネスの核心かつ差別性の源泉～				
13	顧客価値の説得 (2) ～価格戦略：操作しやすいが最も結果に影響する戦略ツール～				
14	マーケティング理論と事業拡大戦略～アンゾフのマトリクスとバリューチェーン分析～				
15	水産物販売におけるマーケティング戦略の批判的検証～マーケティングの限界と可能性～				
キーワード	マーケティング 顧客 競争 市場 新製品開発				
教科書 参考書	プリント教材を配布する。				
評価方法 評価基準	評価方法：期末テスト評点 (70%)、出席レポート (30%) 評価基準：授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	水産食品流通経済論、食料経済学、水産物市場構造論、水産流通加工ビジネス論				
履修要件	水産食品流通経済論を履修することが望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
PPTのスライド等を利用してビジュアルに講義を進めていく。					

学 科 目 名	漁村漁港環境アメニティ論	単位数	2 単位	必修選択の別	選
	Amenity at Fishing Port and Fishing Community	教員名	岸上 光克 (非常勤講師)		
	学習・教育目標 : D (◎)	メールアドレス			
履修年次・学期	2 年前期 (集中講義)				
質問受付	講義の前後				
授 業 概 要					
<p>本授業では、水産資源や漁業技術の発展等を背景とした漁村・漁港の歴史的成り立ちを通して、社会の仕組みや地域社会における人間関係の形成過程について学習する。また、全国各地の水産（漁業）地域における水産資源の利活用や多面的機能に注目した多種多様な地域活性化の取り組み状況を理解する。これらの取り組み事例を知り、水産資源や多面的機能等の特性について理解を深めつつ、地域活性化を検討するうえでの基礎的見地を習得する。なお、授業を進めるにあたり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。</p>					
授 業 の 目 標					
<p>一般目標：近年の社会情勢の変化が漁村の社会構造に及ぼす影響について、論理的に解釈する力を身につけるとともに、漁村における地域づくりについて、その深層的な仕組みを理解する。 行動目標：事例研究を通して、社会を客観的に捉え分析することができるようになる。</p>					
授 業 計 画 ・ 内 容					
1	利用する各種統計データや分析手法等について学ぶとともに、講義全体の内容を理解する。				
2	水産地域活性化とは何かについて理解する				
3～4	漁業センサス等の各種統計や文献を用いて、多様な資源を有する水産地域の現状と取り巻く環境について理解する				
5	地域資源の利活用による6次産業化、農商工連携、都市との交流・連携・協働等の具体的施策を取り上げ、科学的な論理に基づく水産行政の仕組みと施策について理解する				
6	漁場特性に合わせた経営展開や店舗マーケティング等に注目し、農林水産物直売所の現状と課題について理解する				
7～8	食品加工技術、経営能力、人的ネットワーク等を活かした高齢者や女性による起業の現状と課題について理解する				
9	水産資源の利活用、品質管理、リスク管理等にみる地域ブランドの形成手法と戦略について理解する				
10～12	新たな観光形態である地域資源の利活用に主眼を置いたニューツーリズムに注目し、生物多様性や多面的機能を活用した海洋レジャー・体験・交流事業と資源管理、海洋生態系（環境）の保全等を目的とした農山漁村型ワーキングホリデーの可能性について理解する				
13～14	生産と消費を結び付けるとともに、地域のトータルマネジメントを実現するための中間支援組織の役割やその担い手となる人材育成事業の必要性について理解する				
15	各事例を踏まえて体系的総合的な内発的な地域づくりの必要性を論理的に理解する				
キーワード	漁業、漁港、漁村、地域づくり、社会情勢				
教科書 参考書	<p>開講時にプリントを配布する。 参考図書についてはその都度紹介する。</p>				
評価方法 評価基準	<p>評価方法：レポート（70%）とプレゼンテーション（30%）から総合評価する。 評価基準：レポート及びプレゼンテーションによって、授業目標についての理解度、達成度を評価する。</p>				
関連科目	水産地域振興論、水産経済学、海面利用論				
履修要件	水産経済学を履修することが望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
<p>対話型講義を心がける。好奇心と探究心を刺激し、受講者が自ら考える姿勢を身に付けられるよう考慮する。講義の内容を記したプリントを配布するとともに、スライド等を用いて理解を補助する。</p>					

学 科 目 名	海洋法 International Law of the Sea	単位数	2単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	新任教員		
履修年次・学期	3年前期				
質 問 受 付	随時可。三学科共同実験棟教員研究室。				
授 業 概 要					
<p>四方を海に囲まれた日本はエネルギー資源の輸入のほぼすべてを海上輸送に依存している。また、天然資源の乏しい日本にとって、海洋の生物資源や周辺海域に埋蔵される海底資源は経済的な観点から重要である。こうした海洋に関する活動や事項は国際関係の長い歴史の中で形成されてきた海洋法によって規律されている。本授業では、海洋法とはどのような法であるのかについて、「海の憲法」と称される国連海洋法条約を中心に学ぶ。授業内容を理解しやすいよう、授業では具体的な事例のほか、最新のニュースを適宜取り上げる。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。</p>					
授 業 の 目 標					
<p>一般目標：学生は、海洋法の全体像と存在意義を理解する。海洋に関する様々な問題を把握し、問題について海洋法がどのように対処してきたのか・対処しているのかを理解する。</p> <p>行動目標：学生は、海洋に関する問題への現在の対処ぶりについて、自分なりの問題意識や自分なりの考えを説明できるようになる。</p>					
回 授 業 計 画 ・ 内 容					
1	ガイダンス				
2～3	海洋法の歴史と発展：海洋法がどのように発展してきたのかを学ぶ。				
4～6	国連海洋法条約1：海洋の法的区分（特に、領海、排他的経済水域、大陸棚、公海、深海底）について、その範囲（距離）や法的性質などを中心に学ぶ。				
7～8	国連海洋法条約2：海洋の事項別規制について、海洋環境の保護や海洋の科学的調査を中心に学ぶ。				
9～12	漁業の規制：現代社会において漁業がどのように規制されているか、国連海洋法条約や国連公海漁業協定の規定、地域漁業管理機関や環境条約の下での取組などを中心に学ぶ。				
13～14	最近の動き：約30年ぶりに開始された海洋法関連条約（BBNJ新協定）の作成交渉を素材に、海洋の分野における国際関係、海洋法における最新の論点などを学ぶ。				
15	まとめ／定期試験				
キーワード	国連海洋法条約、領海、排他的経済水域、大陸棚、公海、漁業、航行、航行、海洋環境、国連公海漁業実施協定、地域漁業管理機関、海洋生物多様性				
教科書 参考書	<p>教科書：特に指定しない。授業において、レジュメやPPT資料などを配付する。</p> <p>参考書：授業において適宜紹介する。</p>				
評価方法 評価基準	<p>評価方法：定期試験と小テストによる総合評価（定期試験80%、小テスト20%）。</p> <p>評価基準：論述問題については特に次の点から評価を行う。①問いに対して直接かつ十分に答えているか、②適切な文章が書けているか、③海洋法の基本事項を理解しているか、④海洋法の規定や先例等を踏まえて自身の考えを説得的に述べているか。</p>				
関連科目	国際社会と法、水産国際関係論				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
<p>授業は基本的に講義形式で、PPT資料を映写しながら行う。授業内容の理解が進むよう、毎授業の冒頭に復習セッションを設けたり、適宜小テストなどを行う。また、学生からの質問を随時受け付け、その内容を授業冒頭などで適宜履修者全体に共有する。</p>					

学 科 目 名	水産経営分析論 Analysis of Fisheries Business Management	単位数	2単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	板倉信明 itakura@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3年 後期				
質 問 受 付	授業の前後、三学科共用実験棟 2階研究室 (206)				
授 業 概 要					
<p>漁業者の営み(=漁業を営むこと)における効率性や将来性を検討するために必要な手法や視点を習得する。講義では、損益面(収入や経費、それに利益)及び財務面(資金の運用や調達)に関する実際の漁業経営体の統計データを利用して、利益率や自己資本比率などの主要な経営指標を算出し、経営の効率性や変動要因を客観的に検討する。また、授業を進めるにあたり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。</p>					
授 業 の 目 標					
<p>一般目標：漁業経営体に対する経営分析の手法を習得することが出来る。 行動目標：①漁村および漁業者の生活をより実態的な側面から把握し、②漁業生産が今後も継続出来るために必要な課題を見出し得る視点を持つことが出来る。</p>					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス：講義の課題、および実施方法等の説明				
2～3	講義対象と分析方法、使用資料(株式一部上場企業の有価証券報告書のうち、損益計算書及び貸借対照表)の内容や作成方法を理解する。				
4～6	収益の内容：主要な利益率の理解とレポート作成を行う。 作成レポートの解説				
7～9	資金調達と運用の内容：資金調達の方法や効率性の理解とレポート作成を行う。 作成レポートの解説				
10～12	経営効率の状況：投下した資金と獲得利益の効率性の理解とレポート作成を行う。 作成レポートの解説				
13～14	総合的課題に対するレポート作成と検討				
15	まとめ：経営分析における留意点や現実の経営における問題点に関して整理と確認を行う。				
キーワード	漁業生産、成果、収益、資金調達、経営効率				
教科書 参考書	<p>教科書は、使用しない。適宜必要な資料は講義中に配布する。参考書は以下の通り。 ①森田松太郎『経営分析入門』日本経済新聞社、¥3000(税別) ②村形聡『ポイント図解式会計 財務諸表と経営分析』アスキーメディアワークス、¥1700(税別) ③有価証券報告書(大手水産会社等のもの)</p>				
評価方法 評価基準	<p>評価方法は、期末試験評点(80%)、課題提出物(20%)で総合的に評価する。 評価基準は、試験、提出物の評価基準は、授業内容の理解度、達成度とする。</p>				
関連科目	水産経営学				
履修要件	<p>講義課題とその目的をよく理解し、各自問題意識を形成しておくこと。 上記①、②の文献は図書館所蔵。ただ、関心の高い人は購入して自学を勧めたい。なお、他にも沢山の類似書があるので自分の好みに合うものを探してもよい。</p>				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
<ul style="list-style-type: none"> ・レポート作成・提出により各指標に対する理解を図りたい。なお、当該レポートには各自の論理的な考察(コメント)に期待している。 ・問合せや相談は、原則的には研究室に来室して行うこと。 					

学 科 目 名	水産統計データ解析	単位数	2単位	必修選択の別	選
	Elements of Social Data Analysis	教員名 メールアドレス	山本 義久 yama1215@fish-u.ac.jp		
	学習・教育目標：D (◎)				
履修年次・学期	3年 後期				
質 問 受 付	随時、水産情報館2階、研究室2				
授 業 概 要					
水産業に関する統計データの利用法や各種解析手法について、実践的に学習する。また、実際の各地漁業現場での課題について、事例紹介を基に、その要因の関連について学習する。本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：統計データの利用方法、利用上の注意点、及びデータを用いた「分析、使用方法を理解するとともに解析結果を読み取る力を身につける。市場での統計データの関連性について学習する 行動目標：統計情報を基に各種の現象を統計手法により図式化、分析し、その社会的機経済的背景を説明できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	講義の内容と進め方の理解				
2	統計データの利用法、利用上の注意点について学習				
3～13	水産統計データを用いた分析・考察の学習				
	① 各種分析手法の理解				
	② 水産物消費の地理的な差異の分析				
	③ 市場間の差異とその要因について総合的な学習				
	④ 漁獲物の実態と水産統計データとの関連性の理解				
	⑤ 養殖業の経営分析手法における感度分析の学習				
	⑥ 課題に関する分析と他要因との関連性の考察				
14～15	自分の関心があるテーマについて統計情報からデータ収集、分析し、課題に対する分析結果をプレゼンテーションで発表				
キーワード	水産統計データ、産業連関分析				
教科書 参考書	統計データが語る日本人の大きな誤解（本川裕）、Excelで学ぶ統計的予測（菅民郎）、統計学が日本を救う（西内啓）他				
評価方法 評価基準	評価方法：課題提出物（50%）及び発表（50%）で評価する。 評価基準：課題提出物を基に、授業の目標に対する理解度、達成度を評価する。また、理解しやすいプレゼンテーションについて評価する。評価方法；課題提出物（50%）及び小論				
関連科目	コンピュータ経営管理演習, 水産フィールドワーク調査演習				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
授業は水産統計情報の利用法の解説をもとに講義し、演習として学生各自パソコンを用いて行う。水産統計データの利用が画一的な理解にならないように、取得したデータから図を作成し分析し多面的な読み解きを理解するために漁業現場の実態と統計との関連を解説する。また、受講者が自分の関心があるテーマを設け、統計情報からの情報収集・分析・作図・解説する問題解決型の授業として実施する。					

学 科 目 名	水産行政論 System of fisheries administration	単位数	2単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	児玉工 jkodama@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3年 前期				
質 問 受 付	随時 三学科共用実験棟2階教員研究室 (部屋番号 218)				
授 業 概 要					
<p>一般論として行政の役割について学習する。続いて、公的統計等を使用して国内水産業の動向と特徴、水産業をめぐる国内的国際的な動きについて学習するとともに、水産施策や水産業に関わる制度の動向と関係する法令について学習する。そのうえで、水産行政のあり方について考える。</p> <p>なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。</p>					
授 業 の 目 標					
<p>一般目標：国内水産業の動向と特徴、水産業をめぐる国内的国際的な動きを踏まえ、日本の水産施策や水産業に関わる制度の動向と関係する法令について理解する。</p> <p>行動目標：日本の水産施策や水産業に関わる制度の動向に関する知識を得ることにより、水産行政のあり方について考察力を高めることができる。</p>					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	授業全体のガイダンス				
2	一般論として行政の役割について学習する。				
3、4	漁業制度とその背後にある考え方、漁業制度改革について学習する。				
5、6	資源管理施策とその背後にある考え方について学習する。				
7、8	漁業経営の特徴と経営支援施策について学習する。				
9、10	卸売市場制度とその背後にある考え方、卸売市場制度改革について学習する。				
11	魚価対策・流通加工消費対策に関する施策について学習する。				
12	多面的機能と水産基盤整備について学習する。				
13	漁業における国際関係について学習する。				
14	水産物貿易と関連施策について学習する。				
15	まとめ				
キーワード	漁業制度、資源管理、漁業経営、水産基盤整備、卸売市場制度、魚価対策、水産物貿易				
教科書 参考書	<p>教科書：適宜、プリントを配布する。</p> <p>参考書：「ポイント整理で学ぶ水産経済」（北斗書房） 「水産白書」水産庁編（農林統計協会） 「最新水産ハンドブック」（講談社） 「改訂水産海洋ハンドブック」（生物研究社）</p>				
評価方法 評価基準	<p>評価方法：定期試験（80%）と課題提出物（20%）でもって総合的に判定する。</p> <p>評価基準：定期試験と課題提出物を基に授業の目標の理解度、達成度を評価する。</p>				
関連科目	水産経済学Ⅰ、水産経済学Ⅱ、水産特論				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
授業はパワーポイントを使用して行い適宜プリントを配布するが、ノートをとることが望ましい。授業の理解度を把握するため講義終了時に課題を課すことがある。					

学 科 目 名	漁業構造論Ⅱ The Structure of Japan's Fisheries Industry II	単位数	2単位	必修選択の別	選
	学習・教育目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	大谷 誠 mohtani@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3年 前期				
質 問 受 付	随時、水産情報館2階研究室1				
授 業 概 要					
日本漁業の成長産業化に向けて、自然及び社会環境の変化で生じる漁業・養殖業の構造変化と産業的問題、その対応のあり方を学ぶ。とくに構造分析と問題解決の能力を養うために、漁業構造論Ⅰで習得した基礎的知識を発展・応用させることで実践的知識と技能を習得する。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：日本漁業の実態を構造的に理解し、実践的な対応のあり方に関する知見を習得することで、日本漁業の成長産業化に資することができるようになる。 行動目標：日本漁業について①構造分析ができる②取り巻く環境の変化と発生する問題を説明できる③実践的な問題解決方法を提案できる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	1 ガイダンス/本講義の内容と実施方法を把握する 2 日本漁業を取り巻く自然環境と社会環境を学習する 3～4 我が国の沿岸域の制度と利用実態を理解する 5～6 漁業生産の動向、生産構造の歴史的変化と今日の特徴を学習する 7～8 漁業労働市場の動向、経営体の労働力編成の実態と論理を学習する 9～10 経営形態の種類と特徴、各々の経営管理の仕組みを学習する 11～12 水産物の需給動向と流通機構の特徴を学習する 13～14 水産物に対する消費者ニーズと販売戦略の特徴を学習する 15 まとめ/講義内容の理解度を確認する				
キーワード	漁業、養殖業、生産構造、就業構造、経営管理、流通機構、販売戦略				
教科書 参考書	教科書：必要に応じてプリントを使用し、毎授業時間に配布する 参考書：「漁業経済研究」「北日本漁業」「地域漁業研究」「Marine Policy」等の水産経済研究分野を扱う学術論文集				
評価方法 評価基準	評価方法：期末テスト評点（70%）、レポート評点（30%）で総合的に評価する 評価基準：テスト、レポートについては授業目標に対する理解度、達成度を評価する				
関連科目	水産経済学Ⅰ、水産経済学Ⅱ、漁業構造論Ⅰ				
履修要件	漁業構造論Ⅰを履修していることが望ましい				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
随時、授業内容の理解度を確認する小テストを行い、授業の復習が習慣化するようつとめる。					

学 科 目 名	水産流通加工ビジネス論	単位数	2単位	必修選択の別	選
	Fishing Distribution and Processing Business	教員名 メールアドレス	刀禰 一幸 k-tone@fish-u.ac.jp		
	学習・教育到達目標：D (◎)				
履修年次・学期	3年 後期				
質 問 受 付	授業中及び休み中の時間、水産情報館2階 研究室4号室				
授 業 概 要					
水産物流通の全体像を基礎に、加工品毎の内容と水産加工業ビジネスの現状について実学的に理解する。具体的には、水産物流通の構成者、お金の流れ、加工品の種類や特徴、各加工品のビジネス展開について学び、これからの水産物加工品ビジネスのあり方について検討していく。また、受講者各自による水産加工品のマーケットリサーチを行い、その内容についてプレゼンテーションを行う。なお、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：水産物流通の構成者、お金の流れ、加工品の種類や特徴、各加工品のビジネス展開について理解する。ビジネスを意識したプレゼンテーション技術を身につける。 行動目標：水産物流通及び水産加工品のビジネスの特徴と課題を理解し、今後の水産加工業ビジネスのあり方を検討できるようになる。プレゼンテーションを行うことができるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス、本講義の全体像と学習のポイントを把握する。				
2	水産物市場構造の全体像について学ぶ。				
3	水産加工品の種類と特徴について学ぶ。				
4	水産加工業における「歩留り」と「衛生管理」について学ぶ。				
5～7	水産加工品の消費の特徴と現状について学ぶ。				
8～9	ビジネスにおける「お金の流れ」について学ぶ。				
10	プレゼンテーションの手法について学ぶ。				
11～14	水産加工品のプレゼンテーションを体験する。				
15	まとめ				
キーワード	水産加工業、与信管理、マーケティング、マーケットリサーチ				
教科書 参考書	必要に応じてプリント教材などを配布する。				
評価方法 評価基準	評価方法；期末試験（70%）、プレゼンテーション（30%）で総合的に評価する。 評価基準；期末試験およびプレゼンテーションによって授業目標についての理解度・達成度の確認を行う。				
関連科目	食料経済論、水産経済学、水産経営分析論、水産物ロジスティクス・システム論、水産物消費マーケティング論、水産物市場構造論				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
PPTのスライド等を利用しながらビジュアルに講義を進めていく。 受講生全員に短時間のプレゼンテーション体験機会を設ける。					

学 科 目 名	水産物ロジスティック・システム論 Fisheries products logistic system theory	単位数	2単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	藤井 陽介 fujii@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3年後期				
質 問 受 付	随時(三学科共同研究棟2階 研究室 210)				
授 業 概 要					
<p>水産物は、私たちの生活に欠かすことのできない食品である。グローバル化する現代社会においては、水産物の輸送距離が長くなり、ロジスティクスがますます重要となっている。ロジスティクスとは、調達から販売に至る一連のプロセスの全体最適化を図ることで、近年、経営戦略の一環として、注目されている。この講義では、はじめにロジスティクスの基礎理論とその役割について学ぶ。次に、水産物のロジスティクスの仕組みと特徴、実際について学習する。なお、授業を進めるに当たり最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。</p>					
授 業 の 目 標					
<p>一般目標</p> <p>①物流の機能と役割を学ぶ。 ②企業経営とロジスティクスの関係について理解する。 ③水産物のロジスティクスの特性を理解する。 ④水産物のロジスティクス・システムの発展を学ぶ。</p> <p>行動目標</p> <p>① 物流とロジスティクスの違いを説明できるようになる。 ② 企業経営におけるロジスティクスの役割と重要性について説明できるようになる。 ③ 水産物のロジスティクス・システムの特徴について、説明できるようになる。</p>					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンスおよび物流とは何かについて学習する。				
2	経済と物流の関係を理解する				
3	物流の機能（輸送・保管・荷役・包装・流通加工・物流情報管理）を学習する				
4	物流・ロジスティクスの違いと発展（1）について理解する。				
5	物流・ロジスティクスの違いと発展（2）について理解する。				
6	食のグローバル化とロジスティクスについて消費面から理解する				
7	食のグローバル化とロジスティクスについて生産面から理解する				
8	水産物のロジスティクスの特性について理解する。				
9	水産物の流通チャンネルについて理解する。				
10	産地市場を核とした物流体制について理解する。				
11	消費地市場を核とした物流ネットワークについて理解する。				
12	冷蔵・冷凍技術の進展と水産物ロジスティクスの変化を学習する。				
13	IT技術の進展と水産物ロジスティクスを学習する。				
14	水産物のロジスティクスにおける安全性について理解する。				
15	講義のまとめ				
キーワード	情報化 ロジスティクス 流通チャンネル インフラ整備 物流システム				
教科書 参考書					
評価方法	評価方法：レポート（100％）で評価する。				
評価基準	評価基準：レポートについては、授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	特になし				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
参加型の授業を行うため、授業に必ず出席し積極的に参加することを望む。					

学 科 目 名	線形代数 Linear Algebra	単位数	2単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：C (◎)	教員名 メールアドレス	新規教員 メールアドレス未定		
履修年次・学期	1年 後期				
質 問 受 付	随時, 3学科共用実験棟2階研究室				
授 業 概 要					
<p>線形代数とは、連立一次方程式の解に関する学問である。この講義では、まずベクトルと行列の足し算、掛け算からはじめ、それらと連立一次方程式の関係を学ぶ。また、我々が連立一次方程式を解く際に用いた操作が、行列における行基本変形に対応することを学び、その応用として行列の階数と連立一次方程式の解の関係を学ぶ。後半は、時間の許す範囲で行列式、固有値・固有ベクトルを学習し、行列の性質についてより深く探究する。この講義で扱う内容の応用として、行政で実際に使われる産業連関分析を紹介する予定である。</p>					
授 業 の 目 標					
<p>一般目標:行列の計算体系を使うことで、多変数の一次式に関する理論を簡潔にかつ体系的に展開できることを理解する。また具体的な行列の計算（特に行基本変形）を通じて、一般的に成立する事実を実感する。</p> <p>行動目標:行列の基本的な演算を計算できる。行列の行基本変形を行える。行列を通じて連立一次方程式の解を計算できる。行列式の性質を暗唱できる。</p>					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	前提知識の確認				
2～3	ベクトルと行列の定義、足し算、スカラー倍				
4	行列の掛け算				
5	行列の行基本変形				
6～7	行列の行基本変形と連立一次方程式				
8	行列の階数と連立一次方程式の解				
9	行基本変形を用いた逆行列の求め方				
10	逆行列を用いた連立一次方程式の解法				
11	行列の経済への応用：産業連関分析における波及効果分析				
12	行列の行列式とベクトルが張る平行四辺形の面積				
13	行列の行列式と正則性				
14	固有値と固有ベクトル				
15	行列の経済への応用：産業連関論における均衡価格				
キーワード	行列、行基本変形、行列式、固有値、産業連関				
教科書 参考書	教科書は指定しない。必要に応じて、プリントを配布する。 標準的な線形代数の教科書であれば講義内容を十分フォローできるが、無理に購入する必要はない。購入を検討している場合は一度、担当教員に相談することを推奨する。				
評価方法 評価基準	評価方法：講義内の小テスト (30%)、期末テスト (70%) による。 評価基準：小テストは講義内で数回、基礎事項の理解度を評価する。期末テストは小テストの類題を用いて基本的な計算と講義内で扱った内容の基礎事項の理解度を評価する。				
関連科目	特になし				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					

学科目名	漁具漁法学概論 Fundamentals of Fishing Gear and Fishing Techniques	単位数	2単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：D (◎)	教員名	梶川和武 kajikawa@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	1年 後期				
質問受付	随時：E-mailによる予約が望ましい 三学科共用実験棟4F 教員研究室(412)				
授 業 概 要					
漁具の分類を通して各種漁具の構造・特性に関する基礎知識を習得する。漁具の運用に密接に関わる漁業生物の生態・行動の基礎知識を学習する。水産資源の持続的・科学的生産技術の基礎となる漁獲選択性と混獲防止に関する基礎知識を習得する。また、授業を進めるに当たり、本授業をより理解するために最新の水産に関する研究成果や概要を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：我が国の漁業生産に関する制度、漁具、漁法に関する基礎的な事項を理解する。また、漁具の設計ならびに運用に必要となる基礎事項を習得するとともに、水産資源の持続的・科学的生産技術に関する考え方を幅広く習得する。 行動目標：修了者は我が国の漁業生産技術について説明でき、かつ、水産資源の持続的・科学的生産技術に関する基礎知識に基づいて、今後の漁業生産技術のあり方について考えられるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	ガイダンス、漁具漁法学の概要について理解する				
2～3	日本の漁業の現状について、漁業の分類、資源管理制度、水揚高等を通して学ぶ				
4	日本の漁業制度について、学ぶ				
5	魚の習性を利用した集魚、漁獲機構について理解する。				
6～8	各種漁具の構造、漁法、漁獲機構について理解する。(網漁具)				
9	中間試験				
10～12	各種漁具の構造、漁法、漁獲機構について理解する。(網漁具)				
13～14	各種漁具の構造、漁法、漁獲機構について理解する。(釣漁具、雑漁具)				
15	まとめ				
キーワード	資源管理、責任ある漁業、混獲問題、省エネルギー、漁獲技術、漁獲選択性				
教科書 参考書	教科書：テキスト用オリジナルプリントを配布 参考書：「最新漁業技術一般」 野村正恒 成山堂 「漁具と魚の行動」 井上実 恒星社厚生閣 「日本漁具・漁法図説」 金田禎之 成山堂書店 「魚の行動と漁法」 井上実 恒星社厚生閣				
評価方法 評価基準	評価方法：試験評点（80%）、小テスト評点（20%）で評価する 評価基準：試験については、授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	基礎漁具力学、資源管理漁具設計論、漁具学実験				
履修要件	この学科目は指定受講年次に履修することが望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
対話型講義を心がけ、学生からの質問を頻繁に受ける。 毎授業時間に理解度確認のための小テストを実施する。					

学 科 目 名	魚類学 An Introduction to Ichthyology	単位数	2単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：D (◎)	教員名 メールアドレス	竹下直彦 takeshin@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	2年 後期				
質 問 受 付	随時。水産生物飼育研究棟 2F魚類学研究室。メールも可(学籍番号と氏名を必ず記入すること)。				
授 業 概 要					
魚類学の主要分野の基礎として、魚類の歴史と進化、分類、外部・内部形態の構造と機能、生態などを学ぶ。また、水産有用種の生態に関する研究成果を適宜紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：地球上に出現した最初の脊椎動物である魚類の進化、3万種に及ぶ適応放散、水中生活者としての適応、回遊を含む棲み場所の特徴、内臓諸器官の構造と機能、成熟と繁殖、初期発育などについて理解を深める。 行動目標：本講義の修了者は、水産資源として重要な魚類に関する基礎知識を修得し、それらを説明できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	1 魚体各部の名称と測定法を学ぶ。 2 地球の誕生から現在に至る魚類の歴史と進化について理解する。 3～4 分布と回遊について理解を深める。 5 体表の構造と機能について学ぶ。 6 筋肉と骨格の構造と遊泳について理解する。 7 摂餌器官と消化系について学ぶ。 8 鰾の構造と浮力調節機構について理解を深める。 9 呼吸器と循環系および感覚器について理解する。 10 排出と浸透圧調節について学ぶ。 11～12 成熟と繁殖について理解を深める。 13～14 卵発生と初期発育について理解を深める。 15 社会関係と種間関係について理解する。				
キーワード	水産資源, 魚類, 分類, 形態, 機能, 生態				
教科書 参考書	教科書：なし 参考書：魚類学(矢部 衛, 桑村哲生, 都木靖彰編, 恒星社厚生閣)				
評価方法 評価基準	評価方法：期末試験(80%), レポート(20%)で総合的に判定する。 評価基準：期末試験については、授業目標についての理解度、達成度を評価する。レポートについては、講義内容と配布資料の理解度及び表現力、考察力を評価する。				
関連科目					
履修要件	特になし。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
基本的には講義形式であり、パワーポイントを多用する。毎回、講義内容関連のプリントを配付する。期末試験を行うほか、講義内容をより深く理解し、自主学習を促進するために、課題(レポート)を与え、提出させる。					

学 科 目 名	解析学	単位数	2単位	必修選択の別	選
	Analysis of functions Of several variables	教員名 メールアドレス	新規教員 メールアドレス：未定		
	学習・教育到達目標：C (◎)				
履修年次・学期	2年 後期				
質 問 受 付	随時, 3学科共用実験棟2階研究室				
授 業 概 要					
この講義では多変数関数の微分積分学を学ぶ。特に2変数関数に重点を置いて、その偏微分、全微分、連鎖律、極値問題を取り扱う。講義では計算手法の紹介だけでなく、これらの幾何学的意味にも触れながら、なるべく直観的に理解ができるよう説明をこころがける予定である。応用として2変数関数の極値判定法を扱い、それを用いて回帰分析とよばれる離散データを連続データに近似する手法を紹介する。時間が許せば多変数関数の積分を扱う。特に、定義からはじめて、累次積分を用いた計算手法を紹介する。					
授 業 の 目 標					
一般目標:多変数関数の微分の基礎を式の計算と幾何学的直観の両方の観点から学習する。2変数関数の極値判定法の適用方法を理解する。回帰直線の意味を二変数関数の極値の観点から理解する。 行動目標:2変数関数の偏微分、全微分可能性、連鎖律を理解して計算できる。具体的な2変数関数について、極値判定法を用いて極値を推定できる。回帰分析の手法を用いて、離散データの1次近似を求めることができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	1 変数関数の微分の復習				
2	2 変数関数の連続性				
3～4	2 変数関数の偏微分				
5	2 変数関数の全微分可能性とグラフの接平面				
6～7	連鎖律(合成関数の微分・偏微分)				
8	高階の偏導関数				
9	2 変数関数のテイラー展開				
10～11	2 変数関数の極値判定法				
12	微分のまとめ				
13	極値問題の応用：回帰分析				
14	多変数関数の積分の定義				
15	累次積分を用いた多変数関数の積分の計算法				
キーワード	多変数関数、偏微分、データ解析				
教科書 参考書	教科書は指定しない。必要に応じて、プリントを配布する。 多変数関数が掲載された標準的な微分積分学の教科書であれば講義の内容を十分にフォローできるが、無理に購入する必要はない。購入を検討している場合は一度、担当教員に相談することを推奨する。				
評価方法 評価基準	評価方法：小テスト(30%)、期末テスト(70%)による。 評価基準：小テストは講義内で数回行い、基礎事項の理解度を評価する。期末テストは全体を通じた基礎事項の理解度とその理論背景の理解度を中心に総合的に評価する。				
関連科目	線形代数、基礎解析学				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					

学 科 目 名	環境倫理 Environmental Ethics	単位数	2 単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：A(○)・B(◎)	教員名 メールアドレス	桐原隆弘 (非常勤講師) kiri-hara@shimonoseki-cu.ac.jp		
履修年次・学期	2 年次前期				
質 問 受 付	授業前後の教室				
授 業 概 要					
倫理学 (ethics) は人間の行為の善し悪し／正不正の基準を探求する学問として出発しました。今日では科学技術の進歩に伴い、行為の影響範囲がマクロには地球規模にまで、またミクロには生命体の基本構造のレベルにまで、さらに時系列では数百年規模の後続世代にまで拡大しています。そこで倫理学が「自然全体」(地球環境、生態系、生物多様性、景観、居住環境)および「後続世代」の生活の自然条件を考察の対象とすることによって「環境倫理」が成立します。近年の動向としては、環境倫理を生命倫理と関連付けて「自然倫理」ないし「技術哲学」が展開されつつあることが注目されます。本講義ではこうした動向を踏まえつつ、科学技術文明時代における人間の自然とのかかわりについて原理的・実践的に考察する手掛かりを探ります。					
授 業 の 目 標					
一般目標：環境倫理の成立過程・概要・最新動向について理解する。 行動目標：人間の自然とのかかわりについて原理的・実践的に考察する。					
回					
授 業 計 画 ・ 内 容					
	1 概要説明 (倫理学と環境倫理) 2 地球環境と倫理 3 生態系・生物多様性と倫理 4 自然資源の利用権 (1) 5 自然資源の利用権 (2) 6 自然資源の利用権 (3) 7 持続可能性と倫理 (1) 8 持続可能性と倫理 (2) 9 持続可能性と倫理 (3) 10 内的・外的環境と健康 (1) 11 内的・外的環境と健康 (2) 12 内的・外的環境と健康 (3) 13 応用課題 (1) 14 応用課題 (2) 15 まとめ				
キーワード	倫理学、善し悪し／正不正、地球環境、生態系、生物多様性、持続可能性、自然資源、根圏生態系、微量栄養素、共生				
教科書 参考書	参考書：加藤尚武 (編) 『環境と倫理』有斐閣アルマ、2005年 丸山徳治 (編) 『応用倫理学講義 2 環境』岩波書店、2004年 シュレーダー=フレチェット編『環境の倫理』晃洋書房、1993年 その他授業中に参照を指示するインターネットで入手可能な資料等				
評価方法 評価基準	評価方法：学期末の記述試験 (80%)、提出されたコメント (20%) で総合的に評価する。 評価基準：期末試験、提出されたコメントによって、授業目標についての理解度、達成度を評価する。				
関連科目	哲学、技術者倫理				
履修要件	特になし。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
講義資料を配布します。					

学 科 目 名	水産物フードシステム実習 Practical Work in Fishery Food System	単位数	1 単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：D (○) ・G (◎) ・H (○) ・I (○)	教員名 メールアドレス	甫喜本憲hokimoto@fish-u.ac.jp 山本義久yama1215@fish-u.ac.jp 藤井陽介fujii@fish-u.ac.jp 刀禰一幸k-tone@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	1年 前期				
質問受付	随時 水産情報館2階 (山本研究室2、刀禰研究室4) 三学科2F (甫喜本、藤井)				
授 業 概 要					
<p>入学して初めて実習を体験する学生に、水産現場の見学・実体験を通して水産業の理解を促進し、水産流通経営学科での学習の動機付けを行う実習である。具体的には、魚介類の体の構造を理解し基本的な調理・加工の技術を身につけるほか、漁業の生産現場、水産物卸売市場、水産物加工場、小売店等で用いられている技術や衛生管理手法を学び、水産物の生産から消費までのフードシステムを理解する。</p>					
授 業 の 目 標					
<p>一般目標：水産物の生産から消費までのフードシステムを理解するとともに、基本的な水産物の調理・加工技術を身につけ、4年間の学習を主体的に行えるようになる。 行動目標：①フードシステムの内容を説明できる。②基本的な水産物の調理・加工技術を身につけ、商品としての水産物を評価しうる能力をつける。③聞き取り調査やまとめの作業・発表を通じて、問題解決能力とチームワークを身につける。④水産経済や水産物流通において自分なりの関心事を見つける。</p>					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	<p>(水産物調理技術・衛生管理方法を理解し習得する)</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象水産物の漁撈技術や鮮度管理方法、品質の評価方法について学ぶ。 魚体の構造を理解しそれに即した3枚おろしなどの水産物の基本となる捌き方を学ぶ。 捌いた水産物を用いて刺身・焼く・煮るなどの調理を行い、基本的な調理技術を身に付けるとともに、水産物の調理上の特性を理解する。 <p>(水産物の生産から消費までの流過程と各段階で用いる技術・衛生管理手法を学ぶ)</p> <ul style="list-style-type: none"> 内海・外海での海域環境が異なる山口県の水産業の概要と水産政策に関して、理解する 漁業の生産現場の見学・漁業者への聞き取り調査を通して、漁業者の漁獲活動を取り巻く海洋環境や資源変動、生産技術、就業構造、漁獲量や価格変動、漁業経営について学び、漁業の実態を知る。聞き取り相手とのコミュニケーションの計り方を習得する。 水産物流通の基本となる卸売市場を見学し、その仕組みと鮮度・衛生管理手法・取引の方法等を学習する。 水産物仲卸業者や卸売業者の講義を受け、卸売市場を取り巻く状況と現状を理解する。 水産物加工場を見学し、加工技術と衛生管理、販売状況等について理解する。 水産物小売や外食産業について講義を受け、販売技術や衛生管理、販売状況、消費者の動向について把握する。 <p>(学習した内容を班ごとにまとめて発表する)</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習内容を理解し、課題の抽出と問題解決に向け分野別に班内で討議を行い発表する。発表後にレポートにまとめる。 				
キーワード	水産物調理技術、水産物加工技術、漁撈技術、鮮度・衛生管理、実態調査				
教科書 参考書	開講時にプリントを配布する。				
評価方法 評価基準	<p>評価方法：レポート（60%）と発表内容（40%）で総合評価する。 評価基準：レポートや発表内容によって授業目標についての理解度、達成度を評価する。他に、プレゼンテーション技術も評価の参考に使う。</p>				
関連科目	水産物市場構造論、水産地域振興論、水産フィールド調査演習、水産経済学				
履修要件	説明会に出席すること。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
<p>説明会で実習内容に関する資料を配布するので予習しておくこと。水産物の調理・加工について知識として学ぶだけでなく、実際的な水産物の調理に親しみ、身のまわりの水産物及び水産物流通に関心が持てるように心がける。</p>					

学 科 目 名	海洋水産実習	単位数	1 単位	必修選択の別	必
	Practical Work in Fishery and Oceanographic Observation	教員名	水産流通経営学科担任		
	学習・教育到達目標： A (○)・D (○)・E (○)・G (○) ・H (◎)・I (○)	メールアドレス	未定 青木邦匡 aoki@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	2年 前期				
質問受付	随時、担任または講座主任教員の研究室				
授 業 概 要					
練習船においてトロール操業やイカ釣などの漁業操業や海洋観測、漁獲物の取り扱いを実際に体験すると同時に、船内生活や船の運航に関することを体験する。また、寄港地では水産物卸売市場や試験・研究機関など水産関連の施設や機関の見学等を行い、水産業における生産から流通・消費の実態を体験的に学ぶ。					
授 業 の 目 標					
一般目標：洋上での漁業操業と漁獲物の取扱の体験、寄港地での水産関連の施設見学を通じて、水産業における生産から流通・消費の実態を理解する。また、練習船の役割を総合的に学ぶとともに、規律正しい船内での共同生活を通して協調性や社会性を持った生活習慣を身に付ける。 行動目標：①適切な水揚げ作業と漁獲物の取扱を行うことができる。②水産関連施設の役割を説明できる ③船上団体生活における基本的な生活態度を身に付ける。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	<ul style="list-style-type: none"> ・洋上で、船長・機関長等から漁船や海洋についての講義を聴き、海や漁船を理解する。 ・トロールやイカ釣等の漁業操業と漁獲物の取扱の体験をし、漁業生産の実際を理解する。 ・洋上での海洋観測を体験し、海洋について理解する。 ・ブリッジで操船やエンジンルームで機関管理を体験し、漁船の運航を理解する。 ・寄港地で水産物卸売市場や水産の試験・研究機関等を見学し、漁業の生産から流通にわたる幅広い水産業の実際を理解する。 ・実習の反省・まとめを行うとともに、レポートを作成し、提出する。 				
キーワード	練習船、トロール操業、海洋観測、水産物卸売市場、水産物流通、共同生活				
教科書 参考書	練習船の教員によるテキスト・資料、引率担任による資料				
評価方法 評価基準	評価方法：レポート評点(100%)で評価する。 評価基準：授業目標についての理解度、達成度を基準に評価する。				
関連科目	水産物フードシステム実習、流通情報システム設計実習、水産経済・流通調査 水産食品流通経済論、水産物市場構造論				
履修要件	船内では練習船教員と乗組員の指導に従うこと。説明会を事前に実施するので、開催通知に注意し必ず出席すること。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
洋上で共同生活を体験するだけでなく、操業や観測など危険な作業にも従事することから、指導者の指示に的確に従い、災害等に遭遇しないように万全の注意を払うこと。					

学 科 目 名	水産経済・流通調査 Field Survey on the Actual Condition of Fisheries	単位数	1単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：A (○)、D (○)、G (○)、I (◎)	教員名 メールアドレス	大谷 誠mohtani@fish-u.ac.jp 児玉工 jkodama@fish-u.ac.jp 西村絵美nisimura@fish-u.ac.jp (メール件名欄に、①学籍番号②氏名③要件題名を記入のこと)		
履修年次・学期	2年 前期				
質問受付	実習中及び教員研究室、大谷（水産情報館2階研究室1）、児玉（3学科共用棟2階218）、西村（水産情報館2階研究室3）				
授 業 概 要					
県内あるいは県外の漁業地区を訪問して研修および見学を行う。研修では、漁業者、漁業協同組合（以下漁協と記す）、行政機関（市役所や市町村役場など）、それに関連する研究機関などで聞き取り調査や講話の聴講を通じて、漁労技術の変遷や漁業生産への効果、それにそれら関係者との意見交換を行う。また、実習地への出発前に事前学習を行い、実習終了後にレポートを作成する。これらによって、漁業生産及び流通に関する水産業の実態に即した考察力を得ることが出来る。					
授 業 の 目 標					
一般目標：漁業生産が継続的に行える仕組み（制度や漁業者の経営状況の把握）や、水産物の流通方法や価格の決まり方、それに漁協、行政機関、研究機関等の機能や役割を理解する。 行動目標：水産関連分野で活動するために必要な知識や経験を得ることで、より具体的な形で水産業や漁業地域が抱える問題やその対応策を考えることが出来るようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	漁業生産及び加工・流通、産地市場等の水産業の現場に出かける見学研修を行う。調査日程は2泊3日程度で、調査前には調査地の予備的学習を、調査後は調査レポートの作成演習も行う。 夏期休暇中に実施することが多いが、受入地域の事情により変更もありうる。				
キーワード	漁村、漁業経営、産地卸売市場、漁業協同組合、漁協経営、地産地消、地場産業				
教科書 参考書	必要に応じて指示する。				
評価方法 評価基準	評価方法：レポート(80%)、調査活動実態（移動に関わる行動、調査地での質問の頻度など）の評点(20%)で総合評価する。 評価基準：授業目標についての理解度と達成度を総合的に評価する。				
関連科目	水産経済学Ⅱ、水産経営学、水産制度論、水産行政論、漁業協同組合論、水産フィールド調査演習				
履修要件	特になし				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
<ul style="list-style-type: none"> ・実習地だけでなく、他地域、あるいは水産業全体に共通する課題や問題点を見出そうとする問題意識を期待したい。 ・メール送信の場合、上記で示す①～③を必ず記入すること。 					

学 科 目 名	インターンシップ Internship	単位数	1 単位	必修選択の別	選
	学習・教育到達目標：A (◎)	教員名 メールアドレス	水産流通経営学科長 青木邦匡 aoki@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3年 通年				
質問受付	授業中及び随時、3学科共同実験棟2階青木学科長及び担任教員				
授 業 概 要					
中央又は地方公共団体の水産行政機関、水産系統団体、水産関連企業等を受け入れ先とし、受け入れ機関、団体、企業等の業務を体験する。					
授 業 の 目 標					
一般目標：受け入れ先の業務を実地に体験し、社会経験を積むとともに、講義や実習等で得た水産知識や技術を実践的なレベルに高め、自己の就業の適性等についての判断材料を得る。 行動目標：社会人としてのマナーを身につけ、職業人として行動できるようになる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
1	研修前の学習 自己分析を行い、志望動機を明らかにする。マナーを学習する。				
2	研修先の決定 適正や志望動機から研修先を決定する。研修先から注意事項の伝達を受ける。				
3	研修の実施 受け入れ先に赴き、業務体験、研修を行う。				
4	研修後の学習 研修終了後に研修の反省とまとめを行うとともに、レポートを作成し提出する。 注：日数は、受け入れ先の事情により変更されることがある。				
キーワード	特になし				
教科書 参考書	特になし				
評価方法 評価基準	評価方法：レポート作成評点(50%)、受け入れ先の評点(50%)で総合評価する。 評価基準：レポートは、授業目標についての理解度と達成度を総合的に評価する。				
関連科目	特になし				
履修要件	受け入れ先に迷惑がかからないよう、あらかじめ学科において適正診断を行う。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
受け入れ先での研修は1日8時間×5日＝40時間程度(受け入れ先の都合により、研修日数、時間が変更されることがある。)とし、春季・夏季休業中など講義に影響が少ない時期に実施する。現場での業務に従事するにあたっては、受け入れ先担当の注意を厳守し、事故を起こしたり損害を与えることがないよう真摯に行動すること。					

学 科 目 名	セミナー Seminar	単位数	1 単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：A (○)・D (◎) ・E (○)・F (○)・G (○)	教員名 メールアドレス	水産流通経営学科教員 児玉工.jkodama@fish-u.ac.jp 甫喜本憲hokimoto@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	3年 後期				
質問受付	授業中及び、担当教官の指定する時間、担当教員の研究室				
授 業 概 要					
水産流通経営学科で取り組むことができる卒論の研究分野、研究テーマの設定と準備の仕方、研究の方法、結果の取りまとめ方を教授し、発表と討論を通じテーマを解決するうえで必要な論理的解析力、問題解決方法を学ぶ。					
授 業 の 目 標					
一般目標：それまでに習得した水産知識と新たに担当教員から与えられた知見をもとに、卒業論文で取り組む課題について考え、卒業論文に係わる研究・分析手法及び論理的解析力、問題解決能力を身に付ける。 行動目標：①水産業が要求する取り組むべき課題を見つけることができる。②問題解決に必要な方法と能力を身に付けることができる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	1 卒論研究の課題設定と研究・とりまとめの方法の概要と卒論研究の意義について理解する。 2～4 水産流通経営学科の学びのベースとなっている水産経済学に含まれる研究分野とそれによって解決できる水産業の問題について把握する。 5～10 研究の方法、結果の取りまとめ方について理解する。 10～15 指導教員の指導のもと、文献の読解や卒業論文に関する発表・討論を通じて、研究・分析手法及び論理の組み立て方を理解する。				
キーワード	水産経済 水産政策 水産物流通 漁業就業 地域振興 問題解決能力 論理的解析力				
教科書 参考書	開講時に教員が指示する。				
評価方法 評価基準	評価方法：レポート評点(100%)で判定する。 評価基準：授業目標についての理解度と達成度を総合的に評価する。				
関連科目	卒業論文 それまでに履修した講義・実習				
履修要件	なるべく配当年次に履修すること 卒論として取り組みたいテーマについてイメージを持っておくことが望ましい。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
予習・復習のため、課題を与え提出させる。					

学 科 目 名	卒業論文 Graduation Thesis	単位数	6単位	必修選択の別	必
	学習・教育到達目標：A (◎)・B (◎) ・C (◎)・D (◎)・E (◎)・F (◎) ・G (◎)・H (◎)・I (◎)	教員名 メールアドレス	水産流通経営学科教員 流通経営講座主任 甫喜本憲 hokimoto@fish-u.ac.jp		
履修年次・学期	4年 通年				
質問受付	担当教官の指定する時間、担当教員の研究室				
授 業 概 要					
本校における学習の集大成として、学生が研究課題を選択し指導教員の指導を受けながら、研究計画の立案、研究の実施、研究成果の取りまとめを行って卒業論文を作成し、公開の卒業論文発表会でこれを報告する。この間、毎月提出する活動報告書により進捗状況を記録する。					
授 業 の 目 標					
一般目標： 設定した研究テーマについて、研究方法、研究結果の解析方法、論文作成方法を学習の上、自己成長意欲を持ち創意・工夫をしながら自主的また継続的に実験・研究を実行し論文作成を行うことにより、問題点の把握・分析能力を修得し、論理的な説得力のある主張ができるようになる。 行動目標：①社会や水産業が要求する課題を抽出し、その解決方法を提示できる。②調査研究計画を自ら立て、与えられた時間のなかで調査研究を進め、まとめることができる。③問題解決に必要な文献や情報を収集し、適切に分析に用いることができる。④物事の関係性を見つけ、論理的に表現できる。⑤研究室の教員・メンバーとコミュニケーションを図ることができる。⑥得られた結果を分かり易くかつ的確に説明できる。					
回	授 業 計 画 ・ 内 容				
	卒業論文は指導教員による個別指導や研究室単位のゼミを中心として進める。 ●研究課題の決定：社会・水産業が要求する取り組むべき課題を理解し、その解決方法(調査, 実験, 分析)を理解する。 ●研究計画の立案：課題解決のための計画を立案し、期限を考えて実行する。 ●文献などの資料収集：必要な文献等の資料を収集し、学習する。 ●調査等によるデータ収集と分析：調査・文献などから得られたデータを分析・評価する ●論文の執筆：物事の関係性を見つけ、図表や専門用語を使用して論理的に表現する。 ●成果の発表：図表を用いながら成果を効果的に説明し、質問に対する的確な対応を行う。				
キーワード	水産経済、調査、データ分析、生産、流通、経営				
教科書 参考書	指導教員が適宜指示する。				
評価方法 評価基準	評価方法：指導教員の評点（80点）及び発表を聴講した教員の評点（20点）とで判定する。 評価基準： （指導教員による評価項目） ・研究の目的や社会的意義を理解し、技術者倫理に則って適切な調査などを行ったか(A, B) ・教員を含む研究室の一員としてチームワークを尊重して研究に取り組んだか (I) ・主体的に、かつ継続して研究に取り組んだか(G) ・計画的に研究を進め、成果をまとめたか(H) ・最新の専門知識を入手する努力を払い、研究に必要な専門知識や技術を身に付けたか(D) ・必要なデータを取得し、客観的に分析したか(C) ・設定した課題に対して適切な研究方法が採られたか(E) ・卒論研究発表会での的確に研究成果を伝えることができたか(F) （発表会における聴講教員の評価項目） ・成果を的確かつ効果的に伝えることができたか (E・F) ・論理構成が妥当で説得力のある説明がなされたか (E・D・F) ・収集した資料や情報は適切であったか (C・D・E) ・質問に対する的確な対応がなされたか (E・D)				
関連科目	これまで履修したすべての講義、実習				
履修要件	説明会には必ず説明し、卒論テーマは担当教員とよく話し合ってから決定すること。				
教 育 方 法 ・ そ の 他					
水産現場情報や水産行政等の知見を学生自らが情報収集したものを論文として構築するように指導する。					